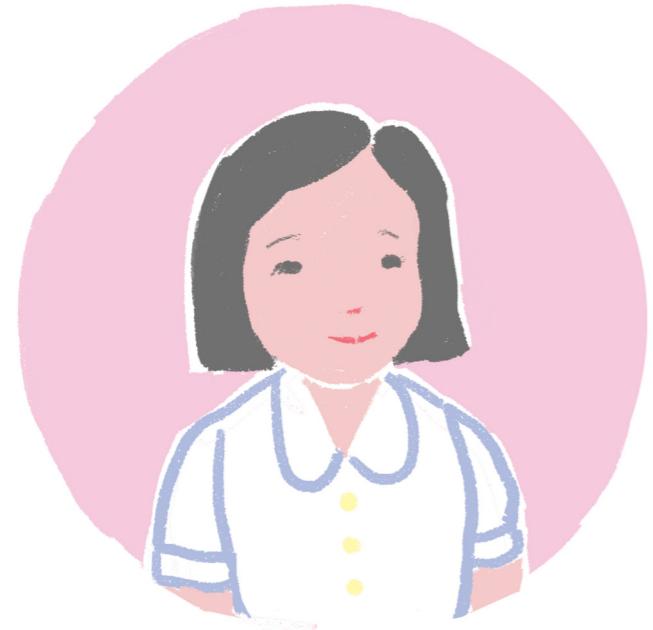


あたたかい 日ざしが ふりそぐ ある日、おかあさんが いいました。



「ソウルに 行ってこよう」

ソウルに 行く りゆうは わかりませんでしたが、
まことのお母さまは おかあさんと いっしょに 出かけました。



おかあさんと いっしょに 行った先は、
ソウルの 青坡洞きょうかいでした。
まことのお母さまは そこで はじめて
まことのお父さまに でいました。
まことのお母さまは おかあさんと いっしょに
ていねいに あいさつを しました。

「この子は だれですか？」

「はい、わたしの むすめです」

「こんなに かわいい むすめが いたんですね」

まことのお父さんは おどろいた かおで お話しされました。



まことのお父さんは しばらく 目を つむり、
かんがえに ふけてから おたずねになりました。

「なまえは なんと いうんだい？」
「ハン・ハクチャです」

「ハン・ハクチャが 韓国に 生まれた！
ハン・ハクチャが 韩国に 生まれた！
ハン・ハクチャが 韩国に 生まれた！」



「神さま！ ハン・ハクチャという すばらしい じよせいを
韓国に おくってくださったのですね。ありがとうございます」

まことのお父さんは そのばで かんしゃの おいのりを ささげられました。

ある 日ようびの ことでした。

れいはいを ささげに きょうかいに きた まことのお母さまに
おかあさんが いいました。

「ふしきな ゆめを 見たんだよ！」

「どんな ゆめですか？」



「白い れいふくを きた 女の人たちが
ピンクの 花を もって 立っているのだけれど、
そこを とおって おまえが まことのお父さまの ところに
あるいていくんだ。そこで 天に いなずまが はしり、
かみなりが おちたんだよ。あつまっていた ひとたちは
おまえを うらやましそうな 目で 見つめていたよ」
「もうすぐ 世の中が びっくりすることが おこるという
知らせのようですね」

まことのお母さまは おかあさんの ゆめの はなしを
ききながら、ふかく かんがえこみました。

しばらくして きょうかいでは まことのお父さまの
ごせいこんの じゅんびが はじめました。

「まことのお父さまの えいえんの けっこんあいてとなる
まことのお母さまは どなただろう？」

「せんじんるいの まことのお母さまに なられるのだから
いい だいがくを 出た方でしょうね」

「たいへんな お金もちで まことのお父さまを
けいざいてきに ささえてくれる方だと おもうよ」

きょうかいの 食口たちは だれが まことのお母さまに なるのか
き 気になって たまりませんでした。

そんな中、ながいあいだ せいせいを つくしてきた
おいのりの おばあさんが いいました。

「ゆめで 空から たくさん つるが とんできて、
なんど 手で おいはらっても また とんてきて、
ついには まことのお父さまを おおってしまったのです。
おそらく 神さまは、なまえに ‘鶴’の 字が つく
おんなひと 女の人を まことのお父さまの けっこんあいてとして
のぞんでいらっしゃるのではないかと おもいます」

そのころ まことのお母さまは 日ようびに なると、
いつも 青坡洞きょうかいの れいはいに さんかされました。

あいかわらず れいぎただしくて かしこく、
まわりの人を おもいやる うつくしい 心を もった まことのお母さまは、
きょうかいに 行くと いつも ひととの 目を ひきました。

まことのお母さまは みことばの べんきょうも ねっしんに されました。

「みなさん、らいしゅうから この きょうかいで ぜんこく でんどうし
しゅうれんかいが ひらかれます」

まことのお母さまは おかあさんと いっしょに しゅうれんかいに さんかし、
まごころを つくして おいのりをされました。

